

## 巻頭言 「喜びの訪れ」

宇野 元

横浜での会議がおわり、帰りの新幹線で友人とおしゃべりしたときのこと。教会の信条が話題になりました。友人がこんな話をしてくれました。学生時代に、信条の言葉にふれた。神が人となった、とあるのに心がとまった。クリスチャンの家庭に生まれ育ったが、このことが、新鮮な驚きをもたらすと同時に、信仰者としてあらたにあゆむ契機になった。

キリスト者は日曜日ごとに集まり、聖書に聞くことから、救い主について共に言い表す言葉を見いだしてきました。イエス・キリストは「まことの神であり、まことの人である」との5世紀の言葉は、聖書の証にもとづいています。「ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ福音書 1, 14)。「時が満ちると、神は、その御子を女から生まれた者としてお遣わしになりました」(ガラテヤ 4, 4)。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」「この名は、神はわれわれと共におられる、という意味である」(イザヤ書 7, 14+ マタイ 1, 23)。イエスという方は、唯一無二のありかたで神と結ばれています。いいえそれ以上です、イエスは神です、そう私たちは告白します。「この方こそ、真実の神、永遠の命です」(1 ヨハネの手紙 5, 20)。

聖書の最初の書、創世記が記す神の世界創造を読むと、神がみずから私たち人間と絆をむすんでいるのがわかります。「神はご自分にかたどって人を創造された」(創世記 1, 27)。いろいろな矛盾や問題をもつ私たちと、いろいろな矛盾や問題をもつ私たちの世界に、神の特別な関わりがあたえられています。そして御子の降誕において、神が人になってくださいました。この特別な出来事によって神の愛が明らかにされています。すなわち、神が私たちの問題を共にしておられ、悩む私たちと共に歩んでおられる。日々、私たちを担っておられる。私たちと世界を新しくしてくださる。

今年もクリスマスの季節を迎えました。ご一緒に喜び、感謝いたします。今世界に、どうしてこのようなことが？ と思う出来事がつづいています。また、神はおられるのだろうか？ という問いがあるでしょう。そのようななかで、それにもかかわらずクリスマスの明るさが与えられています。聖書の証に根拠をもって。